

OMUPニュースレター



発行：大阪公立大学共同出版会

2004年8月31日

第10号

第5回評議員総会、第9回OMUPサロン、懇親会が開催される



▲総会会場となった大阪府立大学学術交流会館

去る6月5日（土）の午後3時より、大阪府立大学学術交流会館にて、第5回評議員（会員）総会が開催されました。創立後3年を経た昨年度は、OMUPシリーズ本、助成金出版などを含め5冊の出版があり、出版事業が順調に推移していることが分かります。決算、予算もそうした状態を反映した内容になっています。議事は以下の通りです。

■議事

- 第一号議案 平成15年度事業決算について
- 第二号議案 平成16年度事業予算について
- 第三号議案 理事の交代について
- 第四号議案 会員の募集と増資について
- 第五号議案 出版活動の推進について

なお、本総会に先立ち、第6回理事会が開催され、総会の議案の他、OMUPの今後の活動方針などが議論されました。

総会終了後、足立泰二氏を囲んで第9回OMUPサロンが催されました。『植物色素研究法』は、植物色素研究会の10周年記念に出版されたもの（サロン紹介、新刊紹介参照）。パワーポイントを使いながらの説明は興味深く、植物色素が様々なところで私たちの生活の中に溶け込んでいることなども紹介されました。

サロン終了後、学術交流会館ロビーではOMUP編集長金井一弘氏の司会で恒例の懇親会が行われました。展示された図書やニュースレターを見ながら、OMUPの3年間の活動の足跡に、参加

していました。



▲第5回OMUP総会



▲懇親会の様子

■平成15年度事業決算及び平成16年度事業予算

収入の部	平成15年度予算	平成15年度決算	平成16年度予算
前年度繰越金	2,536,247	2,536,247	2,801,338
書籍売り上げ	500,000	654,696	1,000,000
出版料（著者から）	6,500,000	3,847,000	5,000,000
出版助成金	0	1,600,000	1,500,000
出版分担金	0	100,000	100,000
出資金（1口10,000円）	100,000	120,000	150,000
広告料	6,000	2,000	3,000
利子	1	18	1
雑収入	0	140,026	1
合 計	9,642,248	8,999,987	10,554,340

支出の部	平成15年度予算	平成15年度決算	平成16年度予算
1 直接出版関係費用			
(1) 製造費	5,000,000	4,684,300	5,000,000
(2) 運送・発送費	35,000	46,570	50,000
(3) 編集デザイン料	600,000	757,500	800,000
(4) 企画出版	1,000,000	0	1,000,000
小 計	6,635,000	5,488,370	6,850,000
2 事務費用			
(1) 交通費	50,000	6,280	50,000
(2) 通信費	50,000	94,150	50,000
(3) 消耗品費	50,000	39,342	50,000
(4) 備品費	0	0	0
(5) 出張費	100,000	0	100,000
(6) 会議費	10,000	4,082	10,000
(7) 調査研究費	100,000	0	100,000
(8) 広報・広告	300,000	145,600	300,000
(9) 渉外費	50,000	0	50,000
(10) 光熱水費	0	0	0
(11) 業務委託	300,000	300,000	420,000
(12) 振込支払料	100,000	7,305	100,000
小 計	1,110,000	596,759	1,230,000
3 その他			
(1) 書籍売上著者清算	0	73,920	50,000
(2) 書籍買取り	0	39,600	30,000
小 計	0	113,520	80,000
3 次年度繰越金	1,897,248	2,801,338	2,394,340
合 計	9,642,248	8,999,987	10,554,340

寄稿

OMUPが発足して4年が経過。今年、3人の新たな理事が誕生しました。そこで、理事就任にあたり抱負を述べていただきました。

OMUPの今後に向けて

大阪府立大学経済学研究科教授
理事 竹安 数博
(駿河輝和氏後任)



OMUPが設立され、関係者のご努力により、順調に業容を拡大されており御同慶の至りである。

筆者も昔から出版事業には関心があり、教員用メールボックスに入会案内があったときは即座に入会申し込みをしたものである。ところが、足立常務理事から説明を受けている内に、いささか腰が引けてきたことも覚えている。

- ・自費出版に近い(自費出版よりも安いが)
- ・取引が大手取次を経由しない地方小出版流通センター扱いである、の2点である。

学術専門書で一般的にはあまり出ないのも多いから、性質上ある程度致し方ないのかもしれない。が、過去に接した大学出版会の発行する本で、そうでなさそうなものいろいろと読んだ経験がある。

- ・東京大学出版会 石母田正著『中世的世界の形成』
- ・法政大学出版局 藤代幸一訳『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』

などである。この他にも東京大学出版会や法政大学出版局の出した書籍などは比較的好く購入した記憶がある。

学術専門書=売れない=自費出版=地方小出版流通センター扱いという呪縛から発想転換する必要があるかもしれない。専門的であっても面白い本、売れる本はあるのであって、そういう本は大手取次ぎ経由で取り扱って欲しい。そうすると売れるし、また財政的にもしっかりして自費負担がより軽減されるであろう。自費負担がなくなれば例えば印税が入らなくても執筆者層は拡大するし、会員も増えてゆくであろう。

今後こういった好循環が回るようになっていくのものである。そうするためには、大手取次ぎが取り扱うような著者やテーマの発掘も必要であろう。初期の立ち上げが軌道に乗った今求められているのは、次なる飛躍に向けたビジョンの再構築ではないかと思われる。

はじめまして

大阪府立大学工学研究科教授
理事 内藤 裕義
(太田宏氏後任)



この度、大阪府立大学大学院工学研究科の太田宏教授の後任としまして理事を仰せつかりました工学研究科電子物理工学分野の内藤と申します。大阪公立大学共同出版会が設立されて5年目を迎えておりますが、このような短期間にすでに10冊の出版がなされたことは、誠に驚嘆に値することと思えます。理事、会員の先生方のご努力の賜物と感服いたしております。

東京大学、京都大学などの大学出版局を有する大学は少なからず存在し、大学出版局は、専門書などの出版を通じて大系だった知の発信を行なうことで社会に対して重要な責務を果たしております。大阪府立大学にもこのような出版会があればと願っていましたが、大学の規模の小ささ故か、出版会が発足するには至りませんでした。一方で、大阪市立大学、大阪府立看護大学、大阪府立看護大学医療技術短期大学部、大阪女子大学、大阪府立大学の5公立大学に属する教員を主体として大阪公立大学共同出版会が設立されましたことは、わたくし達にも自前の出版会が持ったという意味で、喜ばしい限りであります。

大阪公立大学共同出版会の会員の先生方には、旧帝国大学とは一味違った重要な研究をされている方々が大勢いらっしゃいますので、今後、本出版会からは益々ユニークな企画が出版されていくことと思っております。ただ、わたくし自身、本出版会の存在を昨年まで存じておりませんでした。わたくしの所属いたします大阪府立大学大学院工学研究科では、まだまだ認知度の低いことの表れかと思ひ、今後、認知度を高めていく努力をしていく所存でございます。加えて、出版活動のさらなる活性化のため、工学研究科の身近な先生方に国際会議の会議録、講義テキスト、あるいは長年の研究成果の出版などをお勧めしていきたいと思っております。まだまだ、本出版会活動をすべて把握したわけではございませんが、何卒、宜しくお願い申し上げます。

第10回OMUPサロン
開催のお知らせ

大阪府立大学の泉千勢氏監修、パメラ・オーバーヒューマ、ミハエラ・ウーリッチ著、OMEP日本委員会訳の『ヨーロッパの保育と保育者養成』が6月に出版されました。OMUPでは、初めての翻訳本です。翻訳本の場合、海外との著作権の問題など、クリアすべきこともありました。

そうした出版にまつわるエピソードや本について、

著者に語っていただくサロンです。

会場は創業昭和8年のシックでレトロなガスビル食堂です。楽しいお話を聴いてフルコースを味わうのもまた格別です。皆様、お誘い合わせの上ご参加ください。(新刊紹介参照)

- 日時：9月17日(金) 18:00~20:30
- 場所：大阪ガスビル食堂(06-6231-0901)
大阪府中央区平野町4-1-2
(御堂筋線「本町」駅徒歩3分)
- 会費：5千円

自然科学研究者にとって 本を書くということ

大阪府立大学先端科学研究所教授
理事 八木 孝司
(堂丸隆祥氏後任)



このたび私は定年退職された堂丸隆祥先生に代わって大阪公立大学共同出版会の理事を仰せつかり、非力ながら出版会の発展にご協力したいと思う次第である。この拙文をもって理事就任のご挨拶といたしたい。実は前任の大学での助手・助教授時代、私は自然科学研究者が本など書くことはもっての外だと、恩師に教育されてきたのである。研究者はピアレビューがなされる国際誌、しかもできるだけインパクトファクターの高い雑誌に論文を書くことが最高の仕事であって、本を書くのは研究を捨てた人間のすることであると教えられた。しかし私はこの考えに必ずしも賛成ではない。多くの研究者が経験しているように、学術雑誌に論文を投稿するとレビューワーカーから徹底的に修正を命じられ、受理されたいと願うあまり、大抵はレビューワーカーに言われるがままに修正してしまう。せつかくの持論もすっかり縮められたり歪められたりするのである。それに対して自分で本を書けば自分の仮説を大胆に展開できる上、演繹や一般化も思いのままである。研究者が本を書く一番のメリットはこの点にあるだろう。

学術雑誌であれ本であれ、論文が後世に残るといふのは研究者の喜びである。古典といわれる書物から私が自然科学研究者として感銘を受けたもののうち、いくつかを紹介したい。例えば、堤中納言物語の中に「蟲愛づる姫君」（作者不詳、平安時代の作品）という話がある。高校時代に習い、なんとなく覚えていた話であるが、あるとき京都大学図書館長であった万波通彦博士から、京都大学にその校本（江戸時代）があつて京都大学電子図書館で公開されると教えていただいた (<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/nk0/image/nk0hf/fram13.html>)。それで再びその物語を読んでみることにした。ある大納言の姫が身なりをかまわず化粧もせず、虫が

好きで毛虫を育てて蝶になるのを楽しむ変わり者で、両親が困り果てて、世間の評判になってしまったという話である。その中に次のような姫の言葉がある。

「萬の事、もとを尋ねて末を見ればこそ、事はゆゑあれ。いとをさなき事なり。烏毛蟲の蝶とはなるなり。」これは「どんなことでも元を調べて結果を見てこそ、物事には理由があることがわかる。たいへん幼稚なあたりまえのことである。毛虫は蝶になるのである。」という意味である。私はここに自然科学研究の基本原則が書かれているのを知って大変驚いた。平安時代にすでに現代自然科学研究の基本であるメカニズムの解明が説かれていたのである。

また最近、高槻市のJT生命誌研究館で、第6代熊本藩主の細川重賢が書いた昆虫胥化図（こんちゅうしょかず）（1769年）というものを知った（1789年に鶴田健春が模写したものが熊本大学図書館にある）。それはいろいろな昆虫の飼育記録と写生集であり、例えばその中に「堇ノ虫」というページがある。5月28日に幼虫であった虫が6月7日に蛹になり、6月15日に羽化したことが図と共に記されている。図は原色で精細緻密に描かれており、そのチョウはツマグロヒョウモンであることが一見してわかる。気候温暖化とパンジーの栽培普及によって近年大阪平野でも普通に見られるようになった暖地のチョウである。江戸時代のお殿様がなんの役にも立たぬ昆虫を飼育し、精密なスケッチをして正確な記録を残すという行為に私は驚かされた。生物学研究の基本である観察と精密写生がすでに行われていたのである。

このように何百年後の自然科学研究者が古い書物を読んで感銘を受けていようなどとは当時の執筆者は知るよしもない。このように優れた書物は後に評価されることを知っているからこそ、自然科学研究者の本を書こうという気持が後押しされるに違いない。本を書くという作業は大変時間がかかる。今は大学の大変革期で、大学の大多数の自然科学研究者は研究・教育以外に時間を奪われて、本を書くための思考すら行う余裕がない。多忙な時期が過ぎ、後世の人々に感銘を与えるような本を書ける時が1日でも早く来ることを切に願っている。

「OMUP会員が新生にすすめる本」第2号、好評につき今年も刊行！



昨年に引き続き、「OMUP会員が新生にすすめる本」第2号を刊行しました。OMUPと市大、府大、女子大の3生協との共同企画です。

この冊子を活用した大学フェアが今年も生協で開催される予定です。読書離れが叫ばれて久しい学生たち

に、読書人としての先輩からの熱いメッセージがきっと届くことでしょう。

会員の皆様も生協の図書コーナーに足を運んでみてはいかがでしょうか。一味違った面白い本が発見できる、そんな楽しみがきっと待っているはず・・・。



▲市大生協図書コーナー

第8回OMUPサロン

OMUPユニヴァシリーズ② 『地球学へのいざない』

大阪市立大学理学部地球学教室の教授陣14名

- 著者の方々 (敬称略)
- | | |
|------|-------|
| 相川信之 | 吉川周作 |
| 八尾昭 | 升本真二 |
| 江崎洋一 | 三田村宗樹 |
| 前島渉 | 中川康一 |
| 塩野清治 | 篠田圭司 |
| | 根本泰雄 |



去る3月27日(金)夕方5時より、大阪市立大学学術情報総合センターの1階にあるカフェ「ウイステリア」において、第8回OMUPサロンが開催されました。昨年12月に刊行されました『地球学へのいざない』の著者を囲んで、出版にまつわるエピソードなどを伺うサロンです。

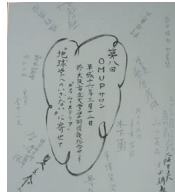
『地球学へのいざない』は、OMUPにとっては待望の「ユニヴァシリーズ第2弾」であり、また、大阪市立大学からの初めての出版であり、二重の意味で楽しみの多い出版物でした。市大の先生方の本ということもあって、執筆された先生方をはじめ、サロンには初めて出席される先生方も多く、新鮮なサロンとなりました。

本著は、大阪市立大学地球学教室の教授14名からの熱いメッセージで綴られている本であり、学問はこんなにも面白かったのか！未来はこんなにも拓かれているのか！と感じる読者は多いに違いありません。巻



末の執筆者紹介では、著者自らの手による先生方の顔のイラスト入りで、別の楽しみも与えてくれます。サロンの中での執筆者のお話を伺っているうちに、地球を知ることが、私たちの生活そのものを知ることだということが分かってきました。本との出会いは、「新しい発見！」の連続だということに改めて実感したものでした。

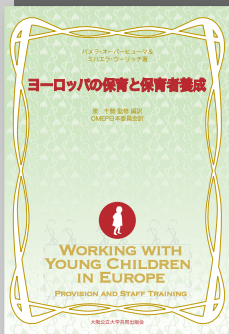
OMUPユニヴァシリーズは、OMUP独自企画で、OMUP会員の教授陣が、大学生・高校生あるいは社会人に、専門分野の研究、人生観、教育論を語るシリーズです。シリーズは数を重ねるほどにシリーズとしての価値が高まります。シリーズ①の『農学生命科学へのいざない』、シリーズ②『地球学へのいざない』に続く、第③、第④のユニヴァシリーズが続々と出版されることを期待しています。会員の皆様、是非、是非、次回シリーズに名乗りを挙げて頂けることをお待ちしております。第2弾の喜びと共に、そんな気持ちにさせられるサロンとなりました。



新刊本紹介

『ヨーロッパの保育と保育者養成』

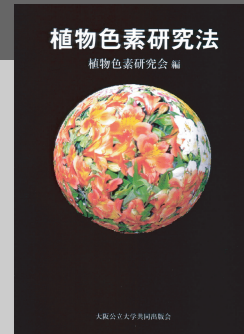
パメラ・オーバーヒューマ、
ミハエラ・ウーリッチ著
泉千勢監修
OMEP日本委員会訳



保育施設に関する詳細な情報
OMUP初の翻訳本。ヨーロッパにおける保育施設に関する詳細な情報と、保育施設で働く職員の養成課程についての研究書。

『植物色素研究法』

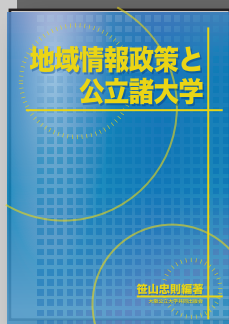
植物色素研究会編



彩(いろどり)の学術指南書
植物色素研究会発足15周年記念出版。中堅研究者が自らの手技を、これから学ぶ若い学徒に寄せる手引き書。

『地域情報政策と公立諸大学』

笹山忠則編著



保育施設に関する詳細な情報
OMUP初の翻訳本。ヨーロッパにおける保育施設に関する詳細な情報と、保育施設で働く職員の養成課程についての研究書。

『ブドウを知らればワインが見える』

中川昌一著



第2版刷りに突入
昨年3月に出版された本著は、果樹園芸の専門家によるワインの文化誌とあって、ワイン愛好家にも好評で今春第2版刷り。

著者は語る

第9回OMUPサロン


新刊書
『植物色素研究法』

大阪府立大学教授 足立泰二 (植物色素研究会編)

足立にとってOMUPからの刊行は2冊目。従って、サロンでお話させていただくのは2回目のはずなのだが、今回は共編著者のカリフォルニア大学アーヴァイン校フランツホフマン教授がちょうど日本滞在中であったので、第1回のOMUPサロンとして専門的な話を分かりやすく話してくれた。従って、私自身が話題提供するのとは今回が初めて。そこで研究分野の紹介も兼ねて、私自身の辿ってきた道をざっと話したあと、「植物色素研究法」が誕生した経緯を中心に話をすることとした。

花の色は華やかで人目に触れやすいことから、遺伝研究や色素の化学研究は既に20世紀初頭から始まった。当初は花の色の違うものを交配してどういう色が分離するかを見て、いわばメンデルの遺伝法則を確認するモデルに使ったり、さまざまな植物のいろいろな色を決める物質の構造を決めることが主だった。日本のこの分野に寄与した植物学者や化学者は決して少なくはない。さて、20世紀の後半になって遺伝学が化学と融合し、遺伝現象を化学的構造体、DNAの自己増殖、情報伝達、そして機能発現へと繋がる、いわば生命のセントラルドグマとして理解されるようになった。そのときも生体内でアントシアニン（かつては花青素と呼称）色素が合成される各段階と色の決め手となる遺伝子とが対応していることが証明されたのだ。

植物色素にはアントシアニンが含まれるフラボノイド類の外にもあるのだが、植物体内にあるときは安定であるのに、抽出したり、分析・測定しているうちに分解するなどの実験上の不都合で研究が進んでいない現実があった。ちょうど1960年代から電気泳動法、核磁気共鳴法が利用できるようになり、1970年代からはHPLC(高速液体クロマトグラフ法)が広く活用されるようになり急速な研究展開がなされた。ベタレイン色素研究の黎明期とでも言えるときに遭遇したのだ。私自身は1973年から1年半、当時西ドイツのフンボルト財団の研究奨学金でシュテットガルトーホーエンハイム大学に客員として滞在した。植物色素を含めた第二次代謝産物のバイオテクノロジー、つまり色素の細胞・分子遺伝学に携わることができた。そのスタンスはいまでも変わっていないつもりである。

1980年代からは植物バイオの実用化があまりにも利潤追求型応用研究として展開し、新千年紀に入った今、日本を含む世界各国で社会的受け入れを容認されがたい状況さえ呈している。その中であって、花の色を豊富にすることは人間の美に対する憧憬とも言えるものであって、社会的には認められ得る、数少ない分野のひとつではある。のみならず、最近では植物の天然色素が、単に食品の安全な着色料として利用されるだけでなく、生体調節機能性あるい

は抗酸化、活性酸素・フリーラジカル消去活性や抗がん作用等が明らかになり、研究はますます多分野に広がりつつある。

この様な時代趨勢にあって、1989年に私どもは九州のへそと呼ばれる阿蘇の外輪山の一角の別荘地で30人の植物色素研究者の集いを計画した。称して「夜を徹して色の道を語る会」である。植物生理学と園芸学と遺伝育種学を専攻する比較的若い研究者・学生集団の勉強会のスタートであった。研究会は中核的存在の先生の突然の事故死、ある筋からの「酒飲み集団」との揶揄・中傷など、決して順調な発展ばかりではなかった。しかし、その後も確実に会員の増加と研究会の質的向上を遂げてきた。その植物色素研究会が創立15年を迎える2004年を記念して、これから色素研究をはじめ、より深めていくための「植物色素研究法」を出版しようと、中堅会員から自然発生的に提案がなされた。22名の共同執筆になるものである。類書は植物学会の大御所でもあり、私どもの直接、間接的恩師である林孝三編著になる「植物色素、実験研究への手引き」が1980年に発刊され、この分野では異例とも思える版を重ね、いわば洛陽の紙価を揚げた実績がある。林孝三先生もご高齢を押し第3回の研究会に参加され、植物色素研究の黎明期のお話を頂いた。しかし先生もお亡くなりになり、好評を博した上記著書も実験指導書としてデータ、研究法ともに新たな展開が要請されるようになって来ていた時期だとする認識を持ったのであった。

今回の「植物色素研究法」出版には、特徴が2つあることを強調したい。まず、ひとつは企画から刊行までの期間は極めて短かったこと。学術研究会の創立15周年をまとめた本にして、学生および若手の、これから研究を展開しようとする人たちに資するようにと計画されたのが2002年の11月、当初の予定では2003年11月に刊行しようと編集者が決まり、原稿を締め切ったのが2003年8月。さすがに当初の目標である創立15周年には間に合わなかったが、2004年の新学期には何とか間に合い、テキストあるいは副読本としての役目を果たすことになった。出版企画から刊行までが1年半というのは、20人以上の分担執筆としては短い。研究会幹事役のまとまりがとても良かったことも幸いしたのですが、20人もの執筆者がいると、原稿督促を要する人がたいてい2、3人はいる。しかし今回はどうにもならない人がいなかった。著者たちの意気込みが違っていた。何しろ初めての分担執筆を経験する若手研究者もいたのだが、総じて若い研究者が原稿提出は早く、研究会の活発さを証明することとなった。

2つ目の特徴は、多方面の学問分野に広がりをもつ、植物生体内産物(専門的には「第二次代謝産物」と呼称)としての植物色素の研究法の最新の知識と文献検索についての、いわば指南書をなしていることである。学生を含めて、若い研究者への数々のメッセージが組み込まれ、随所に工夫がなされた本に仕上がったと、編者の一人として誇りに思う次第である。通り一遍の教科書でもなければ、最近はやりのプロトコル本でもない。

以上、サロンで話した内容をこの紙上を借りて増幅した気持ちだが、できればこの本がOMUPのベストセラーになってくれることを、OMUPマンとしてひそやかに祈念している昨今である。



前回から始まった「リレートーク」第2弾。今回は、理事の北村肇氏のこぼれ話をどうぞ。



A Terrible Story in NY

-グローバル社会を生き抜くために-

大阪公立大学共同出版会
理事 北村 肇

(大阪府立看護大学医療技術短期大学部部長)

私は学生講義で屢々終業ベルの数分前に講義を終え、学生に「雑談」と称する、学問には直接関係のない話をして帰ります。雑談と言っても、できるだけ学生諸君には興味深く、将来役に立ちそうな話や考えさせられる話を用意しています。今日はその中から。

私は25年前、留学で米国はニューヨーク(NY)のマンハッタンに住んでいました。まだ治安の悪い頃で、街で囲まれて金を取られたなんて話は日常茶飯事で、昨夜近所のドラッグストアのオヤジが店に入って来た男にピストルで殺された、なんて話までありました。では暮らしにくいかという逆で、美術館、ミュージカルをはじめ種々の文化・芸術を楽しむことができ、「NY is exciting.」を実感して暮らしていました(本職の研究もしっかりやっていたので、どうぞご安心を)。数ヶ月に一度位は日本人研究者が家族同伴で集まることがありました。そんな日本人仲間で Three Terrible Stories in NY と呼んでいた3つの実話のうちの一つを紹介します。

1975年頃、ある商社マンが新婚の奥さんをつれてNYへ赴任してきました。この奥さんはNYに来てから運転免許を取りました。保険加入は手続き中で完了していませんでしたが、車を買って始めたある日、事件が起きました。彼女はアパートを出て歩道を横切り、車道に置いてあった自分の車に乗りました。彼女の車の前には別の車があったため、発車のためにはいったんバックする必要がありました。彼女は運転席から身体をねじって振り返り後ろの窓から外を見、誰もいないのを確かめバックさせたところ、なんと、彼女の車の下で遊んでいた黒人の幼児を轢き殺してしまったのです。もちろん彼女に殺意はありませんので、ケアレスミスによる事件でした。これが悲劇の始まりです。彼女は裁判を受ける事になり、結審後投獄されました。そしてなんと！30年近く経った今も彼女は監獄にいるのです。更に悲劇の極めつけは、彼女が生きて監獄を出て来る可能性がゼロということです。何故？われわれ日本人にはなんとも不思議で理由を知りたくなります。それは二つの大きな理由によります。①米国では懲罰は加算されるそうです。すなわち、×× 罪で50年、〇〇罪で60年…と、これらを加算すると、過失致死でも合計300年の懲役になったりする訳です。少々模範囚でいても300年が250年になる程度だそうです。故意による殺

人でも10年前後で出所できるどこかの国とは大きな差です。②被害者側との金銭による示談という手段もありましたが、賠償提示額が莫大で、保険を使えない立場では個人で用意するには不可能でした。亭主や親が死ぬまで貯めてもとても届かない額だったそうです。以上二つが主な理由で彼女は一生監獄暮らしというわけです。この話、まだこれでは終わりません。彼女が監獄に入って数年後、商社マンの亭主に会社から帰国命令が出ました。そして亭主は日本に帰りました。そうすると、彼女に面会に行くのも簡単には行けなくなり、とうとう離婚と同じ状態になってしまいました。話はここまでです。そこで学生達に言います、「通常の離婚は愛情がなくなることが原因である。この場合はケアレスミスが原因である。世の中にはこんなことが起こり得る。」と。

この話、われわれにはなんとも不条理で、本人や家族の気持ちを考えると、胸が痛くさえます。実は私にはラリー・KというNY時代の同僚で、今ではある大学の副学長の人の親友がいます。彼とは今でもメールや贈り物でコンタクトがあり、また米国への学会ではいつもNYへ寄って来て来ます。そのラリーにこの話をしてみたところ、彼はすぐに言いました。「事件そのものはケアレスで誰にでも起こりうるが、悲劇を避けられなかったのは、2つの大きなミスがあるからだ。一つは保険に入らなかったこと、もう一つは事件のすぐ後で思い切って大金を用意して良い弁護士を雇わなかったこと。」保険についてはわれわれ日本人も分かりますが、弁護士の件は通常の日本人には馴染みが薄く、まして現地の友人がいない状態では、うまく立ち回るのはまず無理と思われれます。NY時代に聞いた Terrible Stories の一つを紹介しました。グローバルな時代、予期せぬ事態にも対処するには、世界人としての広い意識と強い意志が要るような気がして……。

先日「自己責任」という言葉がマスコミで話題になりました。そんな時代にも拘わらず、現在大学入学のセンター試験では、当日受験票を忘れてきた受験生用に、その場でインスタントの受験票と写真作成のためのカメラや係を用意しておくことが、国から定められています。忘れてきたのは単なるケアレスミスなので救済しようとするものでしょう。この制度は、私には過保護としか見え、どうも賛成できません。

ここに述べた Terrible Story ほどではなくても、社会ではケアレスミスでダメになることはたくさんあり、それを知らしめるのもまともな教育だと思うのです。人生において、学生である時間よりもその後の人生の方がはるかに長いはず。教育とは、学生の間に完結するものではなく、学生生活の後の実社会で生き抜くための礎であるべきだと考えます。これからは、われわれ教員は学生たちをグローバル社会へと送り出すという意識を持たねばならないと思います。彼らがグローバル社会で生き抜けるように、誰かが尻ぬぐいをしてくれる…と教えるのではなく、自己の判断と強い意志を各自が持てるような教育をすべきだと思います。

◆◆ 会員募集 ◆◆

OMUPでは、いつでも会員を募集しています。これから本の出版をお考えの方、図書普及活動に興味のある方などなど、ご参加お待ちしております。

《入会》 入会金:1口1万円(1口以上)
振込先:UFJ銀行中もず支店
普通 3976510
大阪公立大学共同出版会

◆◆ 編集後記 ◆◆

アテネでのオリンピック開催。昼夜逆転の時差をものともせず楽しみたい。OMUPは今年で5年目。ニューズレターは10号を迎え、紙面を一新しました。皆様の投稿お待ちしております!! (mim)

《OMUP事務局》〒599-8531堺市学園町1-1
TEL(072)252-1161 FAX54-9408
omup@w-works.jp又はomup@plant.osakafu-u.ac.jp
http://www.w-works.jp/omup/
編集・発行 有限会社ダブルワークス